

## 編集後記

多根総合病院 副院長 渡瀬 誠

今年の幕開けは1月にアメリカのトランプ政権が誕生し「偉大なアメリカ」の復活をめざすべく様々な政策をおこなっている。声高に強い国を目指せば弱い国々との軋轢は必須であり、その影響はロシア、中国などの大国にもおよび、我が国にとって一番近い北朝鮮には暗い影を落としている。明るい話題が少ない中、例年の清水寺の今年の漢字は「北」であり日本国民の不安を表したものになっている。その他にも加計学園問題やそれが原因で安定していた安部政権が揺らぐなど強い日本の姿は見られない。憲法改正、天皇の退位なども大きな話題の一年になった。来年2月の平昌（ピョンチャン）オリンピックでの日本人の活躍で明るい話題を広げてほしいものである。

一方、多根総合病院医学雑誌は 原著 8 編、症例報告 4 編、その他（看護研究など）5 編、合計 17 編の論文を投稿いただいた。医師 7 編、コメディカル 10 編（薬剤師 2 編、放射線技師 1 編、中央検査部 1 編、臨床工学技士 1 編、管理栄養士 1 編、看護師 2 編、事務 1 編、他施設 1 編）など多職種からの投稿である。医師はとかく統計を重んじた論文作成に終始しがちであるが、様々な職種で *neues*（ノイエス：ドイツ語で新しいもの）は存在し、統計処理しようのないものがあり、本雑誌はそのような部分にも光をあてたいと考え編集責任者として接してきたつもりである。当院で長年培ってきた災害拠点病院、臨床研修指定病院、薬剤部と看護部の取り組み、特別養護老人ホームからの提言を私が指名しまとめていただいた。臨床工学技士の手術時の直接介助、DS コーディネーター育成、DS コンシエルジュなどの新しい試みは、病院経営にも影響を及ぼす可能性があり、興味深く、今後広がりを期待されるものである。

さて私事ながら還暦を迎えおよそ 24 年間勤めた多根総合病院を辞することになった。Yale 大学（血管外科）留学から後期研修として多根総合病院にお世話になり、懸命に一人前の外科医、[Academic surgeon]を目指してきた。一般外科、消化器外科、日帰り手術を数千件経験し、様々な学会発表、論文発表、学会運営に参加したが、今振り返れば満足できるものはない。それは医学が日進月歩、IT はロケットのように目まぐるしい速度で変化しており、人間である私が懸命に追いつこうとしても追いつけないからである。少しは努力したと自己満足したいものである。しかしながら、多根総合病院でのたくさんの素晴らしい人達との関わりは私にとって大きな財産、いや「すべて」である。副院長としてがん拠点病院など 10 に及ぶさまざまな委員会に携わってきたが、とりわけ 7 年間の医学雑誌委員会は思い出深いものとなった。

稿を閉じるにあたって、著者をはじめ、それぞれの論文に関わってくださった方々、委員会の皆様、大変な調整をしていただいた事務局のご尽力に心より感謝申し上げます。論文作成というプロセスを通して多根総合病院すべての職員がスキルアップされることを念じてやみません。多根総合病院医学雑誌そして多根総合病院の更なる発展を祈念し筆を置きます。

(2017年12月)